武蔵野坐令和神社　縁起の語

夢枕　獏

まずは言霊というところから説き起こしたい。

我々日本人は、古来、言霊というものを信じてきた。

言霊とは何か。

この言葉が、日本国において最初に使用されたのは、おそらく『万葉集』であろう。同集の巻第五、八九四の山上憶良の歌に、

神代より　言ひ伝て来らく　そらみつ　大和の国は　皇神の　厳しき国　言霊の　幸はふ国と　語り継ぎ　言ひ継がひけり　今の世の　人もことごと　目の前に　見たり知りたり

とある。

また、巻第十三、三二五三の柿本朝臣人麻呂の歌に、

葦原の　瑞穂の国は　神ながら　言挙げせぬ国　しかれども　言挙げぞ我がする　言幸く　ま幸くいませと　障みなく幸くいまさば　荒磯波　ありても見むと　百重波　千重波にしき　言挙げす我れは　言挙げす我れは

反歌

磯城島の大和の国は言霊の助くる国ぞま幸くありこそ

ともある。

この日本国は「言霊の幸はふ国」であり、その日本国に住む人々や、想い、生活や文化を、その言霊が守っている「国」であると言っているのである。

言霊には、呪力がある。

また、『古今和歌集』の「假名序」には、

やまとうたは、ひとのこゝろをたねとして、よろづのことの葉とぞなれりける。世の中にある人、ことわざしげきものなれば、心におもふことを、見るもの、きくものにつけて、いひいだせるなり。花になくうぐひす、みづにすむかはづのこゑをきけば、いきとしいけるもの、いづれかうたをよまざりける。ちからをもいれずして、あめつちをうごかし、めに見えぬ鬼神をも、あはれとおもはせ、をとこ女のなかをもやはらげ、たけきものゝふのこゝろをも、なぐさむるは哥なり。

このうた、あめつちの、ひらけはじまりける時より、いでにけり。

とあるのである。

意訳しておこう。

「〝うた〟というものは、ひとの心から生ずるもので、この世のあらゆる生命は〝うた〟を作らずにはいられない存在なのである。いったんこの世に生じた〝うた〟は、鬼神をも動かす力を持っており、この宇宙が生まれた時から〝うた〟はあった――」

このように言っているのである。

言葉には呪力がある。

ここにおいてまさに「言霊」と「うた」とは同じものなのである。

古の聖なる書にも、

「始めに言葉ありき」

と記されているのは、まさにこのことを言っているのである。

現代の日本人が何か思う時、何か行動しようとする時、その思い、その行為は、ほのかに縄文に通じている。我々の持っている全てのものの底流には、縄文がある。

たとえば、縄文人は、全てのものには神が、あるいは霊が宿っていると考えていた。水にも、そこらの石にも、木にも花にも虫にも、人の作った道具にも、時に人の心が作り出すかたちなき想いにさえ、その神が宿っていると考えていた。我が日本国に、これほど神々がおわし、これほど妖怪が闊歩しているのは、今も縄文的感性が我々個々の精神や、社会、文化の中に残っているからなのである。

縄文の神というのは、言霊そのものである。

「超ひも理論」、あるいは「超弦理論」と呼ばれているものがある。

アインシュタインが、生涯求めて得られなかった、この宇宙の全てを語ることのできる「統一理論」の有力候補である。

どのような理論か。

その理論によれば、この宇宙の最小単位は、点（粒子）ではなく、線（弦）であるというのである。たった一種類の「ひも」、弦であるところの「絃」が物質の最小単位であると。なのに、どうして、この宇宙には多くの粒子が存在するのか。それは、この極小の「絃」が震えているからだというのである。それぞれの「絃」の震え方が違うので、それぞれが別の粒子であるかのように見えるだけで、しかしその実体は、たった一種類の、一本の「絃」であるというのである。

つまり、ヴァイオリンの絃が震えるように、この宇宙の全ての存在は震えているということになる。つまり、存在というものは弦楽器の如く鳴って、鳴り響いているのである。

「宇宙は音楽に満ちている」

これが、比喩以上の意味を持っていることになるのだ。
この「震え」もまた、『万葉集』や『古今和歌集』によれば、「言霊である」ということになる。
言霊の大神は、全てのものに、音楽のように宿っていると言っていい。
つまりだ。
これは、言霊というものが、全ての、あらゆる神の原形であるということなのではないか。
物語は、時空を旅する旅人である。
旅の乗りものは、人の脳だ。
人の脳は、物語を作らずにはいられない。物語を作るために、人の脳は働き、機能し、進化してきたのだ。
たとえば、直立歩行をはじめた人類の祖が、ある日、森の中で物音を聴いたとする。
この時――
「これは獣が自分を背後から襲って捕食しようとしているのだ」
そういう物語を作ることのできた脳だけが、生きのびるチャンスを得ることができたのである。
人は、宇宙や自然について、あるいは自分について、それが何であるか、それが何者であるかを知ろうとする。その行為が物語となるのである。つまり、人は物語を作り、神話を作る。そして、その物語や神話を他者と共有することができたのである。それによって、人の社会は発展し、生きのびてきたのである。
金を見よ。
お金というものを持っていれば、自分の欲しいものと交換できるという物語を、多くの人間が共有しているからこそ、この社会は成り立っているのである。
一説によれば、ネアンデルタール人は、この物語――神話を多くの人間のあいだで共有できなかったという。せいぜいが、家族単位での共有までであった。我ら新人類は、千人、一万人、百万人、国家単位で、ひとつの考え、たとえば宗教などという物語を共有することができたのである。それ故、ネアンデルタール人は滅び、我々人類は生きのびたのであると。
物語、すなわち、言霊のことである。
そして――
ここが重要なのだが、言霊というのは、つまり、「コンテンツ」のことなのである。

武蔵野の地は、縄文の特異点である。
日本海側から旅をしてきた神が、糸魚川の姫川をさかのぼって、つまりフォッサマグナの西の縁に沿って移動して諏訪の地に至り、そこから縄文ロードを東へ移動して武蔵野に至った。そしてまた、太平洋側からは、別の縄文集団の神が、フォッサマグナの東の縁に沿って移動し、この武蔵野の地に至ったのである。かくして、この地に、系統の異なる縄文の神が出会うこととなったのである。
わが日本国の民が神を拝するとき、その対象は虚であった。宇宙論で言う真空は、ゆらぎによって神のおわします豊穣なる虚であるとわかっている。古来、わが国の民が拝んできたのは、御神体ではなく、「場」であった。土地そのもの、何もない大地そのものを拝してきたのである。信州の生島足島神社がそうであり、九州の宗像大社がそうであり、伊勢神宮でもまた、拝む対象は、実は、そこに何もない豊穣なる虚、大地そのものなのである。

武蔵野坐令和神社

スサノオは荒ぶる神である。この神が哭きいさちる時、青山を哭き枯らし、海をも哭き枯らした。
『古事記』はこの様子を次のように語っている。

八拳須心前に至るまで啼きいさちき。その泣く状は、青山は枯山如す泣き枯らし、河海は、悉に泣き乾しき。ここをもちて悪しき神の音なひ、さ蠅如す皆満ち、万の物の妖悉に発りき。

哀しみの王スサノオのゆく時、大地は響み、激しく震撼した。
スサノオはまた、旅する神にして、闘う神であり、来訪神にして、大地に五穀を生む豊穣の神である。さらにはもののけの王にして、悪龍と闘う物語の王である。すなわちスサノオは言霊の王にしてコンテンツの王なのである。
かくしてスサノオがお作りになった和歌、

八雲立つ　出雲八重垣　妻ごみに　八重垣作る　その八重垣を

は、この日本国に生まれた最初のコンテンツとなったのである。

この武蔵野の地に、出雲の神スサノオと、伊勢の神アマテラスをおまねきした時、これを寿ぎ、鳳と凰の霊鳥が天より飛来してこの地で舞い踊った。この鳳凰を守りとなし、癒しの神、産びの神、コンテンツの神々を合わせ、それを言霊の大神としてこの令和神社におまつりもうしあげることは、まことにまことに意義深きことなのである。